

中年期から高齢期の高血圧症により認知症のリスク上昇

高齢期の血圧と認知機能との関係は、過去の高血圧症の有無やその慢性化によるとされている。また、高血圧が長く続いた後の血圧低下は認知機能に悪影響を及ぼす可能性があることが指摘されている。本研究では、中年期から高齢期の血圧と、認知症、軽度認知障害、認知機能低下との関連について検討した。

対象は米国の4つの地域の住民4,761例(女性59%、黒色人種21%)で、1987~1989年から試験を開始し、2016~2017年の6回目の診察まで追跡した。1回目の診察時の平均年齢の範囲は44~66歳、5回目は66~90歳であった。5回目と6回目の診察の間に認知症を発症したのは516例(11%)であった。認知症罹患率は、中年期から高齢期にかけて正常血圧であった群(833例)では1.31、中年期に正常血圧で高齢期に高血圧症であった群(1,559例)では1.99、中年期から高齢期に高血圧症であった群(1,030例)では2.83、中年期に正常血圧で高齢期に低血圧症の群(927例)では2.07、中年期に高血圧症で高齢期に低血圧症の群(389例)では4.26であった。中年期から高齢期にかけて高血圧症の群や、中年期に高血圧症で高齢期に低血圧症の群は、同期間に正常血圧の群に比べて認知症発症リスクが高く、ハザード比はそれぞれ1.49、1.62であった。高齢期の血圧値に関係なく、中年期の高血圧症の持続と認知症リスクに関連が認められた(ハザード比1.41)。軽度認知障害のリスクについては、中年期から高齢期に正常血圧であった群と比べて、中年期に高血圧症で高齢期に低血圧症の群でリスクが高かった(オッズ比1.65)。認知機能の低下については、血圧のパターンとの有意な関連はみられなかった。

今回の結果から、中年期から高齢期にかけて高血圧症の人や、中年期に高血圧症で高齢期に低血圧症の人は、中年期から高齢期に正常血圧である人に比べて認知症を発症するリスクが高くなることが示された。

出典: Journal of American Medical Association. 2019; 322(6): 535-545.